

第2回 ふくまる夢たまごセミナー

日時 7月31日（金）18：00～20：00

場所 池田市庁舎6階第4会議室

内容 ①「教育のまち池田・各学園の特色」

小林弘典（教育部次長兼教育政策課長）

②「～論より証拠～ 現場実習で何を学ぶのか？」

前川亮太（教育政策課指導主事）

③「現場実習の心得」

阪本庸広（セミナーアドバイザー）

④ 感想等交流

今年度の「ふくまる教志塾」は、新型コロナウイルスの影響により、セミナーも現場実習も例年のようなスケジュールで進めることができていません。しかも、一昨日（7月29日）の夜には、大阪の新規感染者が爆発的に増加したという報道がなされ、本日のセミナー実施について検討しましたが、結果、予定通り開催することといたしました。現場実習についても先行きが全く見通せませんし、今後の展開次第では予定が全く変わってしまうということになってしまいかもかもしれませんが、今回のセミナーは、9月から現場実習実施という想定のもとでの内容としました。

①では、小林課長から「教育のまち池田・各学園の特色」と題し、池田の5学園の概要が伝えられました。全市で実施している小中一貫教育では、中学校区を校区と呼ばずに学園と総称し、各学園がそれぞれにシンボルマークを作成、共通の目指す子ども像を示し教育活動を行っている等の説明がありました。また、ふくまる教志塾の塾生が学校現場で活躍している様子が紹介されました。

②前川指導主事の「～論より証拠～ 現場実習で何を学ぶのか？」では、テンポよく、ユーモアを交え楽しい時間になりました。特に「子どもはできる存在である。」「教師が子どもの限界を勝手に決めてしまっていないか？」塾生が常識と思っていることにゆさぶりをかけ、ものの見方の多様性が示されました。当たり前だと思っていることが本当に当たり前なのかを考えることの大切さ、そして、子どもになぜだろうと考えさせることの大切さを学びました。

③では、「現場実習の心得」について、阪本庸広セミナーアドバイザーから話がありました。

現場実習について、先行きが全く見通せず、現時点では9月から実施していくという方向に変更はありませんので、本日もその予定に基づいて進めています。ただし、今後の動向によっては、セミナーも含めて中止という判断をせざるを得ないということも考えられます。また、塾生のみなさんも体調が優れないという場合だけでなく、「感染が心配だ、参加して大丈夫か」と不安を感じられ欠席することは、何ら否定されるものではありません。自分の身は自分で守る、それが周りの人を守ることに繋がっているということをお互いに意識していきたいと思います。



教育実習もそうですが、ふくまる教志塾の現場実習も、実習生の相手・お世話をするということは、学校現場にとっては余分な仕事です。教育実習は、かつて自分もお世話になったのだから、その時の恩返しと考えることもできるでしょう。しかし、ふくまる教志塾の現場実習生を受け入れる義務は、学校にはありません。そんな中で実習させてもらうんだという意識を持ってもらいたい。と厳しいことを言いましたが、実際には、現場の先生たちはやっぱり「先生」なのです。「教えて(下さい)」と頼りにされて、無下にするなどということはありません。要は実習させてもらう側の姿勢としてどうあるべきなのかを考えてもらいたいということです。

かつて私が中学校の教員をしていた時に、「職場体験学習」というのがありました。ご自身が経験された方は、その時のことを思い出してもらいたいのですが、子どもたちの感想に「楽しかった」というのが結構あるのを見て、「それはちょっと違うやろー」と思ったものです。なぜそんな感想が子どもたちから出るのでしょうか？ それは、体験先で楽なことしかさせてもらっていないから。「職場体験」というのは、「仕事を体験」するということ。みなさんの年齢になればもうおわかりでしょうが、「仕事」って、もちろん楽しいこと、嬉しいこともあるでしょうが、それだけではありません。むしろ「楽しくないこと、邪魔くさいこと、しんどいこと、うまくいかないこと、どうすればいいのかわ

からないこと…」の方が多いのかもしれません。

まだまだ未熟な部分の残る中学生の職場体験学習ですから、醜い現実は見せたくない、夢をもって未来に向かってほしいという思いからそうなるのだらうと思えますが、現実の厳しさの一端を知ることなく職場体験学習を終えるというのはどうなのかというのが私の考えでした。

みなさんが現場実習で「楽しかった」「子どもたちがかわいかった」といった感想をもつことは勿論あってほしいと望みます。が、それだけでは中身の濃い実習が経験できたとは言えないのではないでし

ょうか。大切なことは、自分にとって何がプラスになるかということです。ちなみに、学校に対しては「下働き」「便利使い」と思えるようなことでも、教員を目ざす者にプラスになるであろうことであれば、何でもやらせてみて下さいとお願いしています。

より多くの学びがしたいと望むのなら、より多くの経験をすべきでしょう。どんな仕事にも積極的に関わってください。与えられた仕事で精一杯というのなら別ですが、少しでも余裕があるのなら「何かお手伝いすることはありますか」と自分から仕事を求めましょう。ただし、自分の判断だけで何かを行うのは、勝手な行動となります。必ず許可・了解、指示を受けなければならないということを忘れずに。蛇足ですが、「良かれと思って」と言うことがあります。良かれと思っているのは自分だけなのかもしれません。

今日、配付した資料の中に、開塾式の「振り返り」に対する私の思うところを記したペーパーがあります。その最後は、『「開塾式」における記念講演のみならず、これから始まる「セミナー」や「現場実習」、それらに止まることなく塾生同士の会話の中にも、大学やセミナーへの行き帰りの道すがらにも「師」は潜んでいるのであって、それがまさしく「我以外皆我師」なのだとは私は考える。』という言葉で締めくくっています。言わずもがなですが、世の中には、「他山の石」「反面教師」あるいは「人の振り見て我が振り直せ」という言葉があることを付け加えておきます。



最後になりますが、現場実習に行かれるみなさんには次の点についてお守りいただきたい。

- ・マスクの着用（必須）、手洗い・手指消毒・うがいの励行。
- ・8月中旬以降（実習開始2週間以上前）～実習最終日の間、各自検温を実施し、記録。求めに応じて記録を提出する。
- ・発熱や咳、息苦しさ、体のだるさ等、体調に不安がある場合は実習を見合わせる。

<塾生の感想から>

- 8月末からある教育実習に向けての姿勢を学ぶことができた。受け身の姿勢から学ぶことは極めて少ないことや目的意識を持つこと等、たくさんあった。特に印象に残ったのは、自分がいかに物事を知らないかということを知る謙虚さが大切であるということだ。
- …「悪い所は努力しなくても見える。良い所は努力しないと見えない」確かにそうだと思います。…
- …現場実習では、（今年は特に）受け入れていただいている立場であることを自覚し、誠実な対応、能動的に動くということを意識し、目的意識をしっかり持ちながら学ばせていただきます。
- …子どもが伸びる時は、自分の頑張りを認めてもらった時で、子どもの努力を見逃すことのないようにすることや子どもを褒めることが遅くならないようにすることが重要だと考えることができました。また、誉め言葉が、言葉だけになってしまわないよう、より具体的に様々な言葉を使って褒めることができるよう、現場実習で実際に見たり取り組んだりしたいと思います。

開塾式「振り返り」を読んで …

同じ講義を受けても、同じ書物を読んでも、受け取り方は人によって様々であり、そこから何を学び取るかも同様である。

学校の先生だけに限らず、人は常に学び続けることが肝要であり、その材料はいろんなところに転がっていて、今回の開塾式の記念講演もその一つであるが、何が学べたのかは人によって異なる。加えて言うならば、学んだことを「どう生かすのかという具体の行動」に結びつけようとしなければ、映画を見て「あ～、面白かった」で終わっているのと同じであろう。

今回、「振り返りの時間」が非常に短かったと思われる。が、様々なところに転がっている「材料」から学ぼうとする時、「振り返りの時間」が設定されているから学べるのだとしたら、それは「学びのチャンス」のほとんど大半を捨てているようなものである。「見た」「聞いた」「読んだ」ではなく、そこから「何を感じ取った」のかが次の出発点になるのであって、「振り返る時間」がどれだけあろうとも（なかろうとも）、それに左右されるものであってはならない。

しかし残念なことに、いくら「感じ取った」としても、時間の経過とともに意識は薄れ、やがては忘れ去ってしまう。それを避けるには記録（メモ）し続け、常にその記録（メモ）を増やす努力をし、かつそれを見返し、その時々自分に生かせるものをそこに発見し、具体の行動に移していく。そのための、いわゆる「ネタ帳」のようなものを作っていくことが大事であると考え、現職教員の中で、どれだけの人がこしらえているのか知りたいものである。

『宮本武蔵』や『新平家物語』で著名な吉川英治の言葉に「我以外皆我師」というものがある。私たち人間は、この世に生を受けた瞬間には、言葉はおろか、おそらくは何をも知らなかったものが、周りの人や自然、環境、その他様々な事物・現象を通じて学び、吸収し、成長し、今日の「私」を形成してきた。そして「私」はまだまだ発展途上であり、自身が望むのであれば、生涯成長し続けられるはずである。

「開塾式」における記念講演のみならず、これから始まる「セミナー」や「現場実習」、それらに止まることなく塾生同士の会話の中にも、大学やセミナーへの行き帰りの道すがらにも「師」は潜んでいるのであって、それがまさしく「我以外皆我師」なのだと私は考える。